論　文

安重根のロシア沿海州地域における義兵闘争[1]

朴　敏泳[2]

Study on Ahn Jung-Geun's Righteous Army Resistance in Primorie

PARK Min-young

Abstract

After fleeing from Korea in August, 1907, Ahn Jung-Geun took a part in a righteous army in Primorie. He worked for the righteous army as a middle class commander under the supreme commander, Chun Je-Ik.His righteous army left Yanchian, Primorie on 7th of July, 1908 and made an advance to the north part of Korea, crossing the Tumen river. At this time, 1,000 Primorie righteous army soldiers advanced to Korea, and 200 soldiers among them belonged to Ahn Joong-Geun. On 7th of July right after crossing the river, his army attacked Hongeui-dong, a village near the Dooman river, and achieved success in battle to kill 4 Japanese soldiers. However, his army was defeated by the Japanese army which blocked his way to Samsoo. After the battle, he came back to Primorie at the end of August, 1908. As he advanced to Korea for a month and a half in the summer of 1908, he suffered acute anguish, however, he believed that all Korean people should hold together to defend the independence of Korea. As a result, he formed Danji union（Cutting off a finger union as their pledge）with his 11 comrades. Therefore, his patriotic deed to kill Ito Hirobumi was a part of the righteous army battle that Korean people carried out.

1. はじめに

安重根（1879 ～ 1910 年）が沿海州で活動した期間は、1907 年 10 月から 1909 年 10 月のハルビン義挙[3]までの 2 年間であった。沿海州に滞在したこの期間に、安重根は義兵として活動した。この時期は国内においても義兵戦争が最も熾烈に展開された時期であった。

安重根が決行したハルビン義挙は、韓末義兵戦争 20 年の歴史の大団円を飾った快挙であり、

すなわち義兵戦争の結晶であった。大韓侵略の主役だった伊藤博文を処断した安重根の指先には、当時の韓民族 2 千万人の凝縮された力が込められていた。安重根が義挙後に訊問や公判過程で終始一貫して、自分は義兵として独立戦争、すなわち義兵戦争を決行したのであり、伊藤を処断したのは独立戦争の遂行過程で挙げた戦果であると、堂々と闡明したことが、その明白な証左となった。

このように安重根が沿海州に亡命して義兵として活動することができたのは、1905 年に乙巳条約が勒結[4]される前後から、沿海州が国外独立運動の中心部として浮上していたという時代の所産でもあった。この地域に形成された大規模な韓人社会を糾合して、戦力を結集しようとする民族運動家たちが、大挙ここに雲集していたためであった。安重根もそのような指導的人物の一人だった。

沿海州義兵の根拠地であった煙秋（現在のクラスノ）の一帯で活動していた安重根は、代表的な義兵指導者の一人として浮上した。彼は 1908 年の夏に揮下の部隊を率いて関北地方[5]に深く侵攻し、各地で日帝軍警と戦闘を繰り広げ、艱難辛苦の末、沿海州に生還することができた。その後も、祖国独立のために同胞の間に団結・和合することを力説してまわり、その決意を固めるために 11 人の同志とともに 1909 年春に同義断指会を結成した。こうして見ると、ハルビン義挙は安重根が義兵に投身し、実際に抗日戦争を展開した後、義兵闘争をいっそう強固にすべく同義断指会を結成した土台の上で、義兵戦争に参加した経験と蓄積された力量によって決行されたものだった。

沿海州に亡命してから殉国まで、安重根は終始一貫して自分の身分を義兵であると名言した。それにもかかわらず、安重根が沿海州で展開した義兵闘争の実状は、まだ具体的に解明されていない。本稿では、安重根が沿海州に留まっていた 3 年間に義兵として活動した軌跡を究明してみたい。

2. 沿海州亡命と義兵への投身

安重根は 1907 年 8 月 1 日にソウルで大韓帝国軍隊が強制的に解散される光景を目にした後、すぐに亡命の途につき、北間島を経て沿海州に到着した。安重根は 1907 年 10 月 20 日、韓国人が集団居住していた煙秋に到着し、すぐに海参崴（現ウラジオストク）に入った（『勧業新聞』1914.7.19[6], 尹炳奭訳編 1999:516-517）。

安重根はウラジオストクで啓東青年会の臨時査察を務めながら抗日独立運動の大きな経綸を展開し始めた。啓東青年会はウラジオストクで刊行されていた『大東共報』の主幹であった兪鎭律を会長とし、300 人余りの青年が加入して抗日運動を行っていた団体だった（尹炳奭編訳 2011）。それに続き、安重根は煙秋に渡り、ひときわ高潮していた抗日義兵に投身した。

安重根はそれからハルビン義挙までの 3 年間は沿海州で活動した。安重根の沿海州における活動は「同胞の教育」と「義兵の経営」の二つに集約することができる。ところで、同胞の教育は、韓人社会において義兵を経営するために有利な条件を作り出すことを目的に行った活動

の一環として理解することができるとされる（潘炳律 2009:6）。そうであるならば、安重根が沿海州で展開した一切の活動は義兵闘争ひとつに帰結したといえる。教育救国運動に邁進していた安重根が、義兵に実際に投身した時期は、国外亡命を決行した1907年8月頃であると確認できる[7]。彼の義兵への投身もまた、この時期に全国的に盛り上がっていた義兵戦争の雰囲気と決して無縁ではなかった。

安重根は、1905年の乙巳条約勒約以後、1907年の大韓帝国軍強制解散に至るまで、日帝による大韓帝国の国権侵奪が加重されていく状況において、救国闘争の新たな戦略として義兵闘争を想定するようになった。1907年8月の韓国軍解散を契機に国外亡命を決行すると同時に義兵に投身するようになったことが確認できる。こうして見ると、国外亡命を決行したとき、安重根はすでに義兵闘争を最善の救国戦略と認識し、義兵に投身する決意を固めていたと見て差し支えないだろう。

3. 安重根の義兵部隊の国内侵攻

1908年7月7日から始まった沿海州義兵の国内侵攻作戦は、数次にわたって繰り返し行われた。国内に入った沿海州義兵は、当初は関北地方の内陸部、すなわち三水･甲山、あるいは茂山･鏡城に進出する計画だった。そうして、この一帯で活動していた洪範図義兵や、鏡城義兵などの関北義兵と合流することによって共同の抗日戦線を構築する戦略を構想したのだった。

安重根をはじめとする沿海州義兵の国内侵攻作戦は、崔在亨（1860～1920年）勢力が主軸となった同義軍（同義会義兵）と李範允（1856～1940年）勢力の倡義軍（倡義会義兵）がみな動員され、数次にわたって繰り返し行われた。そして、同義会と倡義会の二つの義兵勢力は、国内侵攻後に互いに連合戦線を構築し、ともに抗日戦争を展開したことが確認できる。この時、安重根は同義軍の右営将として一団の義兵を率い、ポシェトで船に乗り慶興の洪儀洞に上陸した[8]。

国内侵攻作戦に動員された兵力は約1千人規模であると推測される。作戦に実際に参加した禹德淳（1880～1950年）の回顧談では、安重根と禹德淳が率いて渡江した義兵が総勢800人とされ、後述する洪義洞戦闘の直後に咸興警察署が急報した電報には1千人規模であると記録されている。また、韓国駐箚軍司令官が様々な情報を整理して本国に報告した7月20日付電報によれば､700人程度が渡江したことをつかんでいた（韓国独立運動史研究所 2003:105,107）[9]。それだけでなく、倡義軍の後続の援軍が1～2次にわたり少なくとも100人、多くは300人規模で関北地方に侵攻した。こうして見ると、国内侵攻作戦に参加した沿海州義兵の総数は1千人前後だったものと推定できる。

安重根は同義軍の右営将として国内侵攻作戦に参加し、一部隊を率いていた。同義会義兵は最高指揮官である都営将が左・右営将の両翼を従える体制を根幹としていた。このような両翼編制は国内侵攻作戦においてもそのまま準用された。したがって、都営将の全濟益を筆頭に左営将の厳仁燮と右営将の安重根が同義軍を導く最高指揮官だった。

安重根の義兵部隊は、7 月 7 日に豆満江を渡江した後に対岸の慶興郡洪儀洞で抗日戦を開始した。洪儀洞は慶興邑から南東に約 10 キロ離れた豆満江付近にある村だった。彼らは慶興からただちに出動した日本軍と最初の戦闘を展開し、日本軍の偵察歩兵上等兵以下 4 人を射殺する戦果を上げた。洪儀洞を襲った義兵はすぐに北上した（国史編纂委員会 1968:450-451）[10]。

義兵はさらに 10 日の夜明けに新阿山憲兵分遣隊を襲撃した。奇襲を受けた日本軍は一部は慶興方面に逃走し、下士以下 5 人が行方不明、1 人が戦死するなど惨敗した。この時に行方不明と報告された日本兵は義兵に捕虜として捕らえられ、安重根によって人道的観点から釈放された。新阿山戦闘状況報告には「10 日午前 4 時、新阿山の守備隊は約 200 人の敵に撃退された。1 人が戦死し、3 人は慶興守備隊に戻ってきた。残りは行方不明になった（独立記念館韓国独立運動史研究所 2004:91）[11]」と記録されている。ここの慶興守備隊に生還した 3 人というのが、安重根がすみやかに釈放した日本軍捕虜だった。安重根は国際法に則って人類正義と人本主義的立場から、仲間たちの反発を顧みずに日本軍捕虜を釈放したのであった。

安重根が遂行した洪儀洞戦闘と新阿山戦闘は、沿海州義兵が国内侵攻作戦を展開しながら抗日戦を遂行するなかで収めた代表的な勝利にあてはまる。この二つの戦闘は、沿海州義兵が国内に侵攻した初期、すなわち義兵の戦闘力が比較的強力で士気が高まっていた時期に収めた勝利で、日本軍に対する先制攻撃が功を奏したようである（朴敏泳 1998:322）。

安重根をはじめとする沿海州義兵は、7 月 18 日に会寧の南方約 2km の地点まで進撃したことが確認される（国史編纂委員会 1982:457）[12]。会寧まで進出した部隊は、同義軍系列の全濟益・安重根義兵をはじめ、倡義軍系列の金榮瑨・姜奉翼・禹德淳義兵などであった。そして、この戦闘に参加した義兵数は 400 人規模であると推測される。日帝側の記録では 200 人程度とされているが、様々な状況から見て、ロシア側の資料で 400 人ほど把捉されているのが、より事実に近い数値と認められるためである。

安重根部隊をはじめとする沿海州義兵は、7 月 21 日に会寧郡霊山で日本軍との最後の一戦を繰り広げた。しかし、戦力の劣勢により最終的に惨敗した義兵は四方に分散し、一部は沿海州に帰還し、残りは茂山方面に南下を続けたものと見られる。安重根は霊山戦闘の惨敗をきっかけに、その後は煙秋に帰還した。霊山戦闘の直後に戦闘現場を脱出する過程で安重根は禹德淳と葛化春、金榮瑨に会った。安重根は自敍伝のなかで、煙秋に帰還するとき、自分と一緒に二人が同行して豆満江を渡ったと明らかにした（潘炳律 2009:24）。禹德淳はこの時に日本軍に逮捕され咸興に移監されていたが、劇的に脱出に成功し、翌年春にウラジオストクに帰還した（尹炳奭譯編 1999:622）。安重根が煙秋に帰還したときには、友人たちにも見分けがつかないほど容貌は変わり果てていたというが、1 ヶ月半の国内侵攻作戦の間に語れぬほどの苦難を経験し、しばらくは疲労困憊の状態だった。

4. 同義断指会の結成

安重根が義兵に投身してからハルビン義挙を決行するまでの中間の道程に同義断指会があ

る。同義断指会は、まさしく、安重根が決行した義兵の抗日戦とハルビン義挙の両者を連結させる架橋であり、同時に少数精鋭の同志だけで構成され、同義会の設立目的と闘争目標をさらに限定させた同義会の後身のような結社であった。

1908年7月に国内侵攻作戦を決行した後、咸鏡北道会寧の霊山戦闘で敗北を喫し、その年の8月末から9月初め頃に煙秋に帰還した安重根は、沿海州各地の韓人社会を歴訪した。 霊山戦闘に敗北した後に、安重根が沿海州の韓人社会を巡回したときのことを桂奉瑀は次のように記録している。

> 公の最も爽快な旅は、烏蘇里などの地と北満州一帯を視察したことであるが、会寧郡の霊山戦争に早期に成功できなかったことを大いに憤り、檀君4,241年10月9日に同志二人を連れて海参崴に立ち寄り、水清[13]などの地を通り過ぎて、西北に許発浦[14]地方の様子を調べ、再び北満州の三千里、黒龍江を渡ってサルマリア[15]まで、あまねく遍歴して戻ってきたが、その間の日時は3ヶ月を超え、里数は数万余里になった。（尹炳奭譯編1999:519）[16]

この記録によれば､安重根は1908年11月2日に2人の同志とともに煙秋の根拠地を離れ､3ヶ月にわたり沿海州の周辺部の各地に形成された韓人社会を歴訪したことがわかる。大規模な国内侵攻作戦が特段の成果もなく終わった後、韓人社会では義兵熱が急激に冷めて萎縮した状況になったが、これを反転させ打開するための方策として義兵遊説を決行したのだった。安重根は韓人社会を歴訪しながら、あるいは教育に力を注ぎ、あるいは団体の組織化に尽力した（尹炳奭訳編 1999:168)。

同義断指会は、このように義兵闘争を続ける条件が厳しくなった状況の下で、義兵結社である同義会の趣旨と精神を継承し人心の団合を通じて祖国独立と東洋平和に向かってさらに邁進する目的で、安重根が主導して結成した救国結社だった（尹炳奭 2009:102-104)。

安重根が同義断指会を結成した日付を明確に把握することは容易なことではない。ハルビン義挙の後、安重根は訊問と公判の過程で、あえて日帝に混乱を引き起こして同志を保護する意図から、結成時期について数回にわたり異なる陳述をしたからである。したがって、新聞や公判時の陳述内容から、同義断指会の結成時期を推定ことは難しい。

ところで、桂奉瑀は1909年2月7日に同義断指会を結成したと明記している。ところが、後述するが、同義断指会が結成された直後に密偵を通じてその情報を入手した慶興警察署長が上部に報告した情報文書には、断指した日付が「3月2日」と記録されている。このような状況に照らして見ると、桂奉瑀の「萬古義士安重根傳」に記録された1909年2月7日は旧暦であると考えられる。この2月7日を陽暦に換算すると、2月26日となり、上記の記録の日付に比べて4日早くなるが、現時点では、同義断指会が結成された日付を、この2月26日と推定しておくのが最も合理的であると思われる。

安重根は同志11人とともに左手薬指の第一関節から先を切り落として同義断指会を結成し

た。その名簿は安重根の陳述の中で数回にわたり出てくるが、同志を保護する目的で仮名を示したため、実際の名簿を確認することは決して容易ではない。

安重根が同志と同義断指会を結成した事実は、断指の直後に日帝軍警の情報網に捕捉された。断指直後の 3 月 12 日、慶興警察署長が密偵の李春という者から得た情報にもとづいて、安重根らが断指同盟した事実について「去る 3 月 2 日、安應七、白圭三、金起龍の三人が煙秋で会合し義兵の件に関して合意し断指同盟した」と把握していた（国史編纂委員会編 1984:803）[17]。このような断指同盟の情報は、数ヶ月後のハルビン義挙の決行直後に安重根が訊問を受け公判が進行された状況においてはほとんど活用されなかったようである。いずれにせよ、上記の資料から、安重根をはじめ、白圭三、金起龍ら 3 人は同義断指会の盟員として明白に確認されたといえる。

安重根が断指会員は全部で 12 人だったと初めて明らかにしたのは、12 月 3 日の境警視による訊問の時だった。この時、安重根は同義断指会に関連してこれまで陳述した内容は偽りであり、これから真実を明らかにするとしながら、断指した 12 人の姓名と出身地、身分などを提示した。続く 12 月 20 日の第 8 回訊問のさいにも、上記と大同小異の名前を陳述した。以上の 2 回にわたる安重根の陳述をもとに筆者が作成した名簿は下表の通りである。

表 1　安重根が陳述した同義断指会の会員名簿

12 月 3 日陳述の名簿		12 月 20 日陳述の名簿
安重根　盟主、教育家、義兵、31 歳、平安道		安重根
姜起順　刑務官	同、40 歳、同	姜基順　義兵、40 歳前後、ソウル
金基龍	同、30 歳、同	金基龍　理髪職、30 歳、平安道で刑務官を務めたことあり、平安道
鄭元桂	同、30 歳、咸鏡道	鄭元植　義兵、30 余歳、住所未詳
朴鳳錫	同、32 歳、同	朴鳳錫　農夫、34 歳、咸鏡道
柳致弘	同、40 歳、同	劉致弘　農業 , 40 歳前後 , 咸鏡道の人と思われる
曹順應	同、25 歳、同	趙順應　農夫、義兵、25-6 歳、咸鏡道
黄吉秉	同、25 歳、同	黄吉炳　農業、27-8 歳、咸鏡道
白南奎	同、27 歳、同	白南奎　農業、27 歳、咸鏡道
金伯春	同、25 歳、同	金海春　猟夫、義兵、25-6 歳、咸鏡道
金天化	同、26 歳、同	金千華　義兵、労働者、25-6 歳、原籍未詳
姜計瓚	同、27 歳、同	姜斗瓚　労働者、25-6 歳、平安道

安重根が二度陳述した 12 人の人物はほぼ一致している。この名簿に挙がっている名前が、実際に断指した会員の実名を念頭に置き、それに仮託して、安重根が任意に造った仮名であると仮定すれば、様々な情況から推し量って実名を類推することができるだろう。 まず、金起龍はすでに実名が明らかになっていた人物であるため議論の余地がないが、残りの名簿は名前

の二文字が入れ替わっている場合と、姓が入れ替わっている場合が想定できる。これに該当する名簿は、姜起［基］順、曹［趙］順應、黄吉秉［炳］、白南奎、姜斗［計］瓚らで、それぞれ姜舜璣、趙應順、黄炳吉 , 白圭三 , 姜昌斗を指す仮名のようである。また、金天化［華］は、安重根が国内侵攻作戦の時に、霊山戦闘の後に一緒に煙秋に帰還した葛化天を指す変名のようである。その他、鄭元柱 [周]、朴鳳錫、柳致弘、金伯 [海] 春ら 4 人の実名は現在では推定するのが困難である [18]。結局、安重根が陳述した上記の名簿に基づき同義断指会 12 人のうち実名で確認される人物は、盟主の安重根をはじめ、白圭三、金起龍、姜舜璣、趙應順、黄炳吉、姜昌斗、葛化天の 8 人であり、残りの 4 人は現在では実名を確認しにくい状況である。

5. 同義断指会とハルビン義挙の関係

安重根は 1908 年 7 ～ 8 月に 200 人規模の義兵部隊を率いて国内侵攻作戦を決行した後、同義断指会を結成した。前述したように、彼は国内侵攻作戦から辛苦の末に生還した後、沿海州各地の韓人社会を歴訪し同胞間の団結と和合を強調した。安重根は、沿海州各地の韓人社会の歴訪を終えて煙秋に戻り、これまで自分が力説した団結と和合の証左を提示するために、すなわち韓国独立を成し遂げるために献身するという憑據［よりどころ］を示すために、同志とともに断指した。つまり、同義断指会は義烈闘争を決行する目的で結成された団体ではなく、祖国独立を成し遂げるための固い決意を示すために結成した団体だったといえる。後日、安重根が訊問を受けながら、断指の目的を次のように述べたのは、この文脈で理解できる。

> 断指の目的は大韓国の独立を図るためであり、独立するときまでは如何なる方法、手段も選ばず敢行するつもりであり…断指した当時は民心が散乱しており、また私を信じる者がいなかったので、私は国家のために尽力する熱意を他人に見せて、民心を収拾するために断指したのです。古老の伊藤を殺すことだけが目的ではありません。
>
> （国史編纂委員会編 1978:400）

上記の陳述の要諦は、安重根らは独立運動の再興を図る目的から断指したのであり、さらに、乱れた民心を収拾して独立運動を展開しようとし、民衆からの信頼を得るための証拠（憑據）として断指を決行したということにある。また、桂奉瑀が書いた「萬古義士安重根伝」には、次のような同義断指会の趣旨書が紹介されている。やや長文であるが、その全文を引用しておこう。

> 今日、我々韓国人種は、国家が危急であり生民が滅亡する地境に直面し、どうすれば良いか、その方法を知らず、あるいは曰く、良い時が来れば大丈夫だとか、あるいは曰く、外国が助けてくれればいいとか言うが、このような言葉はみんな意味のない言葉であり、こんな人は、ただ遊ぶのが好きで、他人に依頼することばかりを楽しむわけだ。

我々二千万同胞は、一心団結して生死を顧みず、後には国権を回復し、生命を保全するのである。しかし、私たち同胞はただ言葉でばかり、愛国だとか一心団体だとか言うが、実際には、熱い心、そして懇切な団体がないので、特別にひとつの会をここに組織する。その名前は同義断指会だ。私たちの一般会友が指を一つずつ切るのは、たとえそれがほんの小さなことであっても、第一に、祖国のために身を捧げる証（憑據）であり、第二には、一心団体する標なのだ。今日、我々が熱い血により青天白日の下に誓うので、どうか、これからは自ら進んで以前の虚物を立て直し、一心団体して決心を変えず、目的に到達した後には、万々歳で太平同楽を享受しようではないか。（尹炳奭訳編 1999:525）[19]

この趣旨書を通して見ると、同義断指会は祖国独立のために進んで命を捧げることを固く決意し、それを実践するために結成された一心団体だった。したがって、会盟の時に決行した断指は、その場で国に身を捧げる証であると同時に、一心団体の表象となったのである。独立と一心が、この趣旨を貫くキーワードであるという事実を考慮すれば、このような時代状況で結成された同義断指会の根本的趣旨を十分に推測できるだろう。

ここまで述べてきた同義断指会の結成趣旨や目的は、安重根が決行したハルビン義挙の時代的背景として言及することはできるが、義挙を決行した主体として直接に結びつけたり想定するのは、史実から相当な距離がある点に留意する必要がある。ハルビン義挙に関与した安重根の同志のなかに同義断指会の会員が一人も含まれていないという事実は、この点に関して示唆するところが大きいだろう。

同義断指会が掲げた一心団結を通じた独立運動の犠牲的実践意識は、それがすぐさまハルビン義挙を決行せしめる底力になったという点で、その歴史的意義が大きい。安重根は自ら決行したハルビン義挙を義兵戦争の次元で展開された独立戦争と認識していた。安重根がハルビン義挙を「私一人だけの考えでなく、まさに韓国二千余万同胞の代表として決行したのだ」（安重根義士崇慕会編 1979:397）と指摘した場面もこのような脈絡であった。以上からわかるように、安重根は義兵として義兵戦争＝独立戦争を決行した結果、日帝侵略勢力を形象化した伊藤博文を処断するという大きな戦果を上げたのである。安重根はハルビン義挙直後の 1909 年 11 月 6 日に 15 ヶ条からなる「伊藤博文罪悪」とともに日帝官憲に提出した「韓国人安應七所懐」と題した文章で、ハルビン義挙を決行した理由を明らかにしつつ、対外侵略と文明破壊を根幹とする帝国主義の反文明的属性を暴露しようと行動を起こしたのだと考えたものだと、次のように含みのある言葉で明らかにした。

天は万民を生み、天下の人びとをみな兄弟とします。各々が自由を守り、生を好み、死を厭うのが普通の心情です。今日、世の人はいわゆる文明時代と称しています。しかし、私はひとり「そうではない」と長嘆しています。そもそも文明は、洋の東西はもちろん、賢愚、男女、老少を問わず、各々が天賦の性を守り、道徳を重んじ、お互いに競い争うことの無い心で、安らかに暮らし愉快に働き、ともに太平を享すること、これを文明という

べきです。ところが、現今の時代はそうではありません。いわゆる上等社会の高等人物が論じるのは、競争の説であり、それがきわまるのは殺人機械です。ですから世界中に砲煙と弾雨が絶える日が無いのです。どうして慨嘆せずにいられるでしょうか。今に到って東洋の大勢は、これを言うならばすなわち、恥ずべき状態がもっとも甚だしく、まことに記し難いことです。いわゆる伊藤博文は、いまだに天下の大勢を深く考えることができず、残酷な政策を濫用しています。東洋全体が将来魚肉の場となることを免じます。ああ、天下の大勢の将来を深く考えるならば、有志の青年らは、どうしてすすんで手をこまねき、策も無く、坐して死を待つことができるでしょうか。この私はそう思ってやまぬがゆえに、ハルビンの公衆の面前で一砲し、伊藤老賊の罪悪を公然と批判し、東洋の有志の青年たちの精神を目覚めさせようとしたのです。

（安重根義士崇慕会編 1979:577-578）

これを見ると、安重根がハルビン義挙を決行した究極の意図と目的は、韓民族の特殊な立場と境遇の次元を越えて、人類普遍の高貴な価値としての平和と自由を具現し、これを守護することにあったといえる。それゆえ安重根は、伊藤博文が当時の東洋において人類の絶対価値を破壊する最大の公敵であると見なして、彼を処断したのだということが分かる。この点が安重根の独立運動の理念と、彼が決行したハルビン義挙の両者がともに有する高貴な意義であると評価せずにはいられない。

6. おわりに

本論で見てきたように、安重根は沿海州で3年間義兵として活動した。安重根が沿海州で活動していた時期は、国内で韓民族が全力を投入した救国の聖戦、すなわち義兵戦争が熾烈に展開されていた時だった。そのような国内義兵戦争に呼応して、大規模な韓人社会が形成されていた沿海州においても、抗日義兵がこの時期の民族運動の大勢になるほど活発に展開された。安重根は沿海州義兵を率いた代表的な指導者の一人だった。

1907年10月に沿海州に到着した安重根は、義兵団体の同義会で活動した。彼は沿海州義兵が1908年7月から8月にかけて大規模な国内侵攻作戦を決行したとき、同義軍の右営将として200人ほどの部隊を率いて参戦した。安重根の部隊は、1908年7月7日に豆満江を渡った直後、豆満江の河岸の洪儀洞を襲撃し、日本軍人4人を射殺する戦果を上げた。続いて新阿山に上がり、7月10日に憲兵分遣隊を襲撃して勝利を収めた。この時、安重根は他の義兵たちの反発をも顧みず、自分たちの過ちを悔い改めた日本軍捕虜を人道的立場から釈放した。 このような行為は、安重根が人類の普遍的価値である平和と自由を志向していたという事実を明らかにする証左といえる。

しかし、安重根の部隊は国内に侵攻した他の部隊と連合勢力を構築した後、会寧の霊山で日本軍と繰り広げられた大規模な戦闘で惨敗してしまった。安重根は霊山敗戦の後、1ヶ月以上

関北地方の各地を転戦しながら、あらゆる辛苦を経験した後、沿海州に帰還した。つまり、安重根は一ヶ月半の国内侵攻作戦の期間のうち前半期の半月間だけ抗日戦を繰り広げ、霊山戦闘の後の１ヶ月は関北地方の各地を転戦しながら、死地を脱することに全力を傾注したのである。

このような義兵戦争の経験を通して、安重根は救国の新しい戦略を模索した。その結果、人心団合をモットーとし、同志間の結束と独立運動にいっそう献身することを盟約し、その徴表として同志 11 人と共に同義斷指会を結成したのである。ハルビン義挙は、このような面からみると、韓末義兵戦争の範疇のなかで、新しい救国闘争の手段として設定された義烈闘争の形態で決行されたのだといえる。

（翻訳：勝村誠）

注

[1] 本稿は朴敏泳（2010）を元にして本論文集に寄稿するために書き直したものである。また、本稿の内容は 2014 年 5 月にロシアのウラジオストク極東連邦大学（Far Eastern Federal University）で開催された「ロシア韓人移住 150 周年記念学術シンポジウム」（独立記念館と極東連邦大学の共同主催）において「安重根の沿海州地域抗日闘争」というテーマで発表した 。

[2] 圓光大学校圓佛教思想研究院責任研究員 / 前・独立紀念館韓国独立運動史研究所首席研究委員

[3] ［訳注］安重根がハルビン駅構内で伊藤博文を射殺した事件の韓国における呼称。

[4] ［訳注］乙巳条約とは日本が大韓帝国の外交権を奪った第二次日韓協約のこと。乙巳勒約とも言う。軍事的圧迫と脅迫によって締結を強要されたものであることを示すために、韓国語で「強制する」ことを意味する「勒」の文字が用いられる。

[5] ［訳注］現在の朝鮮民主主義人民共和国の咸鏡南道・咸鏡北道・両江道・羅先特別市の一帯を指す。

[6] 桂奉瑀「萬古義士安重根伝（1879 ～ 1910）4」『勧業新聞』1914 年 7 月 19 日。

[7] 「강동쉰해」『韓人新報』ロシア暦 1917 年 10 月 7 日 .

[8] 「강동쉰해」『韓人新報』ロシア暦 1917 年 9 月 10 ～ 17 日 .

[9] 「機密受第 1709 号」1908 年 7 月 20 日 ,「參 1 發号外」1908 年 7 月 20 日 .

[10] 『暴徒に関する編冊』「慶興分署長発 電報」1908 年 7 月 9 日 ,「鏡城署長発 電報」1908 年 7 月 10 日 .

[11] 「参 1 発 303 号」1908 年 7 月 11 日 .

[12] 「暴徒に関する編冊」「鏡城署長発電報」1908 年 7 月 18 日 .

[13] 現在のパルチザンスクの旧名称。

[14] 現在のハバロフスクの旧名称。

[15] 現在のブラゴスロヴェンノエの旧名称。

[16] 桂奉瑀「萬古義士 安重根伝 6」『勧業新聞』1914 年 8 月 2 日 .

[17] 『暴徒に関する編冊』「警秘親第 22 号」（1909 年 3 月 12 日）.

[18] 最近見つかった沿海州義兵の名簿「義員案」にって載っている「金春華」が、様々な情況から推し量り断指会員の「金伯［海］春」の実名だと推定されることもあるが、確信できない。

[19] 前掲、桂奉瑀「萬古義士安重根伝 9」『勧業新聞』1914 年 8 月 23 日。

参考文献

＜新聞＞

『大東共報』・『勧業新聞』・『韓人新報』・『皇城新聞』.

＜資料集＞（刊行年順）

国史編纂委員会編（1968）『韓国独立運動史 資料 11 義兵Ⅳ』正音文化社 .

国史編纂委員会編（1968）『韓国独立運動史 資料 6』.

国史編纂委員会編（1968）『韓国独立運動史 資料 7』.

安重根義士崇慕会（1979）『安重根義士自叙伝』.

国史編纂委員会編（1984）『韓国独立運動史 資料 13』.

独立紀念館韓国独立運動史研究所編（1994）『龍淵金鼎奎日記』（印影本）.

独立紀念館韓国独立運動史研究所編（2003）『韓末義兵資料 Ⅴ』.

尹炳奭訳編（1999）『安重根伝記全集』国家報勲處 .

尹炳奭編訳（2011）『安重根文集』独立紀念館韓国独立運動史研究所 .

＜論文・著書＞（刊行年順）
独立運動史編纂委員会編（1971）『独立運動史 1』.
愼鏞廈（1980）「安重根の思想と国権回復運動」『韓国史学』韓国精神文化研究院（2).
愼鏞廈（1985）『韓国民族独立運動史研究』乙酉文化社 .
朴敏泳（1998）『大韓帝国期義兵研究』ハン・ウル .
尹炳奭（2000）「安重根の沿海州義兵運動と同義断指会」『韓国独立運動史研究』（14).
尹炳奭（2009）「安重根の『同義断指会』の補遺」『韓国独立運動史研究』（32).
潘炳律（2009）「ロシアにおける安重根の抗日独立運動の再解釈」『韓国独立運動史研究』（34）
朴敏泳（2009）「柳麟錫の義兵統合の努力とハルビン義挙」『毅菴学研究』毅菴学会（7).
――― （2010）「安重根の沿海州義兵闘争研究」『韓国独立運動史研究』（35).
――― （2010）「安重根の同義断指会研究」『軍史研究』陸軍本部（129).